

「地域学総説」の挑戦 4

柳原邦光*

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part IV

Kunimitsu YANAGIHARA

キーワード：地域、地域学、地域づくり、文化的個性、生の充実、ノーム、わたし(自分)、人と人とのつながり、アイデンティティ、移民

keywords : region, regional sciences, community development in a region, cultural character of a region, a satisfying life, norm, self, social ties, identity, migration.

はじめに

「地域学総説」（鳥取大学地域学部3年生必修科目）は、前年度の蓄積の上にさらなる積みあげをはかるために、毎年、独自の目的を設定して授業計画を立てている（2009年度授業計画を参照）。2008年度の場合、地域をみる視点として俯瞰的・客観的視点の他に「わたし」からの視点を設定して、地域を二つの異なる角度から把握することを試みた。また、地域のもつ意味を、日常生活のレベルで、ポジティブな面とネガティブな面の双方において捉えようと試みた。この結果、地域を見る視点が定まり、遠かった地域も身近になった。しかし、同時に、危惧すべき点や課題も明らかになった¹。

そのうち最も重要なものを挙げれば、「わたし」から地域を見る場合、どうしても視野が狭くなりがちになることである。「わたし」から、つまり自分自身からみたとき、目に写るのは生活の場としての小さな空間である。「ローカル」といってもいいこの空間を地域と捉えて、素朴にいわれる「まちづくり」や「地域再生」が地域学のすべてだと錯覚してしまうかもしれない。「わたし」から地域を見るといっても、自分の身近にあって目に見えるもの、自分に直接関わるものだけが重要なのではない。たとえ見えなくとも、自分自身がそのなかで生きている、複雑な「構造」や「関係性」が

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

¹ 詳しくは、柳原邦光『「地域学総説」の挑戦3』、『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第5巻第2号（2008年）を参照。

あるはずである。それは何なのか、「わたし」の生活とどんな関係にあるのか。このような問いを立てることが必要だと思われた。また、この問いは、後述するように、必ずや俯瞰的・客観的視点と交差するはずである。

2009年度の地域学総説は、この問題にチャレンジした。第1部の光多報告と仲野報告、そして、第4部「地域から世界を見る/世界から地域を見る」の3報告である。つまり、第1部と第4部は、3年間の地域学総説ではなしえなかった「構造」や「関係性」を捉え、俯瞰的・客観的視点に接合するための試みなのである。これが2009年度のもっとも重要な課題であった。そこで、本稿は、第1部と第4部においてこの問題をどこまで掘り下げることができたのかを、現時点での地域学像を提示しつつ、検証する。最初に、第1章で第1部を、第2章で第4部を簡潔に紹介する。次に第3章で、その成果を組み込んで、現時点での「地域学」像を示す。最後に、今年度の成果と今後の課題を明らかにする。

ただ、ひとつ予めおことわりしておかねばならない。筆者は「地域学総説」の成果をできるだけ客観的に伝えて、「地域学」の輪郭をはっきりさせたいと願っているが、実際には、報告の内容を正しく理解できず、誤って解釈した点多々あると思われる。また、豊かな内容をもつ報告を筆者なりの問題意識で強引に単純化した可能性も否定できない。この意味で、本稿はやはり筆者の地域学理解でしかない。

なお、本稿では、地域学部教員も外部講師の方もすべて敬称を省略させていただくことにする。

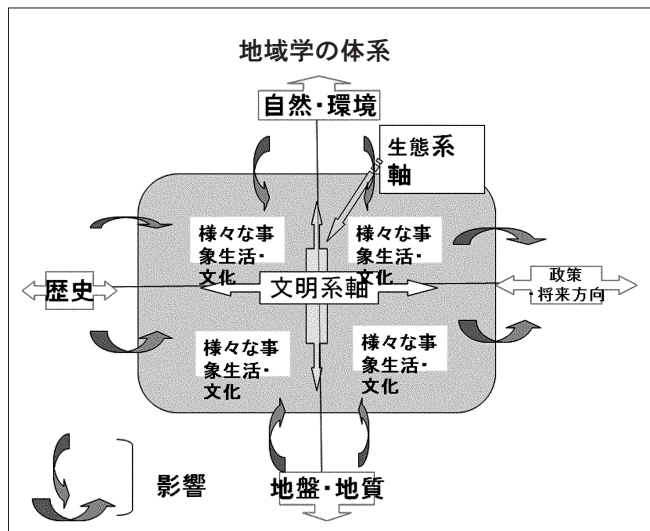
1. 第1部 地域を見る視点

(1) 俯瞰的・客観的視点からみた地域

第1部は3回の報告からなる。柳原邦光「これまでの地域学の成果」、仲野誠「『ここ』に生きる『わたしたち』を考えるとということ」、光多長温「グローバル化の中の地域経済」である。筆者の報告については、「地域学の挑戦3」の内容と重複するので、今回は必要とところだけを述べるにとどめ、仲野誠と光多長温の見解を紹介・検討する。

最初に2008年度までの講義から光多長温と吉村伸夫の見解を簡潔に紹介して、地域を理解するための基本的枠組みと人にとっての地域性のもつ意味を確認しておきたい。

光多によれば、「地域」の土台をなしているのは自然環境で、その上で人間の生活が営まれている。「地域」とは、自然環境（生態系軸）と人間の営み（文明系軸）の相互作用から生まれたもの（二つの軸の交点）である（図「地域学の体系」参照）。これが、われわれが地域を客観的に捉えるための基本的枠



組みである（図「地域学の体系」参照）。これが、われわれが地域を客観的に捉えるための基本的枠

組み（地域のマトリクス）であり、地域性を把握する試みは基本的にこの枠組みにしたがって行われる。

地域のもつ特性（地域性）は、文化に焦点を当てたとき、地域文化ということもできるだろう。吉村伸夫によれば、人は無意識のうちに地域文化を身につけて育つ。このため、地域文化は身体化され人の個性の一部になっている。したがって、「人間の尊厳」に関わる。吉村にとって地域学の目的は「生の充実」であるが、この地域文化を無視して「生の充実」は得られない。

「生の充実」という表現は、精神的というか、知的な部分を連想させるが、筆者の理解では、これだけではない。たとえば、早朝、新鮮な山の空気を吸って、「ああ気持ちがいい、今日も頑張ろう！」という感情の動き、土地の食べ物を食べて「おいしい！」とか、土地の言葉で友達と思う存分しゃべって「ああ楽しい」という感覚、こうしたことも「生の充実」に含まれるはずである。それを「田舎者」だとか、「変わっている」とか、といて否定されれば、心が硬くなって自然に振舞えなくなる。もちろん、「生の充実」は、人と人との関係のありようにも関わっている。人と人との関係にも、これが当たり前だという前提があって、それが地域によって異なると思われる。こうしたことを考えれば、地域文化（地域性）が人の生活にとって無視できない意味をもっていることがわかるだろう。

（2）仲野誠の問題設定―「わたし」と「いま・ここ」からの地域―

おそらく人は地域性を自覚することなしに生活している。地域性とはいわば日常であるから、自覚しないのは当然のことだが、説明されたとしても、地域性の重要性を頭では理解できるが、感覚的にぴんとこない、リアリティがない、という人が少なくないのではないだろうか。

仲野誠の考察は、「地域を実感できない」ことを率直に認めるところから始まる。地域や地域性を自明の前提として考えるのではなく、誰にとっても確かな「わたし」と、「わたし」が生きる固有の時と場である「いま・ここ」から考えることによって、地域性を捉えなおし再検討しようというのである。

仲野がもっとも重視しているのは、「わたしの幸福」、「わたしたちの幸福」で、この幸福は、他者とどうつながっているのか、「支え支えられる関係」を築いているかに関わっているという。「地域」はこのような関係が形成される場のひとつ、この意味で「よりどころ」であるはずだが、「いま・ここ」が「わたしのもの」だという感覚があるかという点、おそらくそうではない。とすると、「人々が実際に生きている地域」と「よりどころであるはずの地域」との間には、ズレがあることになる。このズレをもたらしめているのは何か、仲野にとってこれが問題である。そして、この問いを立てたとき、「わたし」のまなざしは「わたし」を包み込んでいる構造と関係性に向かう。

仲野は、この問題を考えるとき、3つの往復を提案している。①「わたし」の「いま・ここ」を規定している社会構造・産業構造・価値/規範・制度・振る舞いのなどの次元を自由に往復して、そこに「わたし」を位置づけること、つまり、「わたし」を相対化すること（次元間の往復）、②わたしたちの日常であるローカルと、それと密接に関連しているナショナル、グローバルのレベルとの間を往復して、「ここ」を相対化すること（空間の間の往復）、③過去・現在・未来という時間の間を往復して、「いま」を相対化すること（時間の間の往復）、である。つまり、「わたし」の「いま・ここ」を構造と関係性と時間のなかに位置づけて、「わたし（たち）の幸福」を考えることである。「わたし」の思考の枠組みを広げ、見えないもの、経験していないことを想像する力を鍛えることである。こうした不断の試みが「現実の地域」に対する厳しく確かなまなざしをもたらし、地域を

「よりどころとしての地域」に変えることにつながるのではない、これが地域学の課題ではないか、というのである。

したがって、現実の地域は決して絶対的な、不変のものではなく、「わたしたちの幸福」の「よりどころ」としての「地域」になることを目指して、つねに見直しと再構築の対象であり続けるといえる。

これまでのところを整理すれば、次のようにいえるだろう。実体としての地域が現存していて、人はそこから自己の個性の一部と尊厳を獲得している。この意味で、人の「生の充実」にとって地域性はきわめて重要である。しかし、地域は必ずしも「わたしたちの幸福」の「よりどころ」になってはいない。地域を「よりどころ」にするには、「わたしたちの幸福」を構造と関係性と時間のなかに位置づけて、思考の枠を広げ、地域を絶えず見直し再構築していかなければならない。「地域」(仲野のいう地域)は、現に存在するものであると同時に、未だ実現していない、これからそうあってほしいと願望されるものでもある。

(3) 光多長温の視点—地域経済と地域のウェルフェア—

光多報告「グローバル化の中の地域経済」は、内発的発展と外発的発展の観点から、主として19世紀以降の世界と日本の経済の動きを各国の対応の仕方とともに概観し、続いて、戦後の日本の地域経済の動きをフォローして、グローバル化時代において地域経済をどのように見るべきかを論じた。

この報告の特徴は、内発的発展と外発的発展の観点から世界経済と地域経済を分析している点である。内発的発展とは、「それぞれの地域にある文化的伝統を生かす又は作り変えることをベースとして地域を保持・発展させていくこと」である。ここでいう伝統には、信仰や価値観などの意識構造の型、家族や村落、都市などの社会構造の型、地域のもつ技術の型が含まれる。外発的発展とは、地域の外から資源・資金・生産形態をもちこんで地域の発展を図ることをいう。たとえば、企業誘致や公共事業である。要するに、地域性に根をもつもので地域の発展を図る(地域のウェルフェアを高める)か、そうでないものを外からもってきてそれに依るか、ということである。

報告によれば、19世紀以降の世界各国の対応も、日本の経済のありかたも、二つの発展方式の間で揺れてきたが、今日のようにグローバル化と市場経済化が急速に進む状況にあっては、国家規模でいえば、保護貿易は世界のウェルフェアを低下させる可能性が大きく、回避すべきである。地域経済については、外発的発展の発想から内発的発展に切り替えるべきであるという。

今年度の地域学総説の目的との関係で筆者が理解した結論は次の2点である。①地域の経済や生活はローカルなレベルで完結しているのではなく、国家の経済政策・国土計画やグローバルなレベルの変動と密接にリンクしている。このため今日ではグローバル化の実相を無視しては、つまり地域だけをみていては、地域は理解できない。地域をみるには、世界を見る必要がある。②内発的地域発展の源である地域資源は、新たな視点で、自然環境や文化も含めて、幅広くみなければならない。

光多の見解の根底にあるものは何だろうか。光多は報告の冒頭で「いくつかの問いかけ」をしている。そのなかに「経済成長は人や地域の幸せにつながるか？」がある。報告は生活の基盤である地域経済のあり方を地域性との関係において論じたが、その視線の向こうには、地域の人々の幸福(ウェルフェア)がある。筆者にとってとくに興味深かったのも、この点である。とりわけ、経済を考えるとときに考慮すべき要素として、人の幸福に関わるものがカウントされていたことである。

たとえば、経済の指標をGDPではなくGPI(Genuine Progress Indicator)で考えるべきだという提言では、GDPには算定されない、地域サービス（人的サービス、介護、地域活動など）への適正な対価支払いとそのためのルール作りが主張されている。地域資源についても、夕焼けなどの風景、雪や風、さらには歴史・文化・おもてなしの気持ちなどが挙げられている。経済という言葉から連想される利益や物質的豊かさだけではなく、人が生きるということ自体が、光多の「ものさし」に組み込まれている。

光多は前述の「地域のマトリクス」に基づいて、主に経済の側面から地域（性）を客観的に把握し、そこから地域のウェルフェアを高めることを考える。アプローチはまったく異なるが、そのまなざしの先にあるものは、吉村や仲野のそれに重なるのではないだろうか。

2. 第4部「地域から世界を見る/世界から地域を見る」

第4部は次の3報告からなる。内藤久子「スラヴ文化の『再生』—チェコ人のナショナリズムと精神性」、韓燕麗「中国系移民の映画とそのアイデンティティ」、児島明（和光大学）「教室のなかの世界／世界のなかの教室」である。

（1）内藤久子の見解— 地域意識の形成と3つの力—

内藤報告は、今日の「中央ヨーロッパ（中欧/東中欧）」という地域意識の源泉を探る試みの一環として、中世末から19世紀前半にまでに及ぶ長いタイムスパンでチェコにおける地域意識の形成を論じた。ここでいう地域意識は、厳密に言えば、「民衆の基盤」があるとはいえ、チェコ人の多くに共有された地域意識というよりも、パラツキーのような歴史家や「民族再生運動」に積極的に関わった人たちの地域意識というべきかもしれない。オーストリア帝国の中で、今日のチェコといわれる地域の人々が文化的・民族的アイデンティティを中心にひとつのまとまりをつくろうとしたのであり、内藤はこの試みの中に地域意識の形成を読み取ろうとしたのである。

この報告には重要な指摘が多々あるが、ここでは、そのうち3点を挙げておこう。ひとつは、地域意識が自然発生的に生まれたものではなく、チェコ人としての望ましさ、アイデンティティを求める人々の強烈な危機意識から、彼らの主体的認識において形成されたという点である（内的形成力）。

しかしながら、この地域意識は様々な国々や民族、政治勢力とのせめぎ合いの過程において、とりわけヨーゼフ主義と称されるハプスブルク帝国の政策、啓蒙思想やJ.G.ヘルダーの多元的文化概念の影響を強く受けて形成されたものでもある（外的形成力）。そのため、チェコ文化を「普遍性を主張するヨーロッパ文化の一部である」というような、ヨーロッパ文明の枠組みの中で自文化の価値を正当化しようとする言説もみられる。チェコの地域意識は一種の生存戦略として複雑な関係性の中から生まれてきたものといえるだろう。これが2つ目である。

3つ目は、地域意識の源泉は何か、という問題である。彼らは民族の起源を、過去に、歴史に、求めている。共同の記憶・物語を必要としたといってもいい。もちろん、15、16世紀のフス派の運動と屈辱的な敗北、18世紀のチェコ語の剥奪とドイツ語の強制という重い歴史があり、それによって初めて生まれた意識であるが、ありのままの歴史というよりも、過去の出来事から独自に選び取ってつくられた歴史といえるかもしれない（歴史的要因、過去の力）。

内藤は報告の最後で、「地域もまた、アプリアリかつ客観的に存在するのではなく、人間の認識において成立するもの」だと述べている。

チェコの事例は、地域意識が内的・外的・歴史的な3つの力の複合の所産であることをよく示している。

（2）韓燕麗の見解—地域とは脱構築のタームである—

韓は、華僑と華人、すなわち自分の国を離れてマイノリティとして生きる人々をとりあげ、彼らの作成した中国語映画の表象分析を通して、こうした人々のアイデンティティの問題に迫った。韓は冒頭で、誰もが同じであることを求める国民的アイデンティティや国民文化、そしてそれを前提にした見方に対する違和感を表明している。これが「地域」を考えるとときの韓の基本的なスタンスである。

韓にとって、「地域」は政治的なものではない。流動的で、はっきりとした境界線をもたない、緩やかなつながりである。だからこそ、国家の重苦しさ、生きにくさを緩和するものと期待しているようである。これは強固なアイデンティティと地域意識を求めたチェコとは正反対の選択である。

中国語映画の表象分析から判断すると、韓のいう地域は実体というよりもむしろ心の中で想起されるものなのかもしれない。また、人々にぴったり張り付いて剥がれないものというよりも、人々によって選び取られるものである。もちろん、選び取るといっても、大きな力が働く中での、限られた条件下での選択であるが。

韓はまた、「地域」は人々が生きるための未知なる空間ではないか、とも述べている。筆者はまだこの「地域」を具体的にイメージできないが、国民国家やナショナル・アイデンティティとは異なる、新たな空間が模索されているといえるだろう。

（3）児島明の見解—日系ブラジル人の存在が照らし出す地域の意味—

人を移動する存在と位置づけて、ここから「地域」を考察したのが、日系ブラジル人の生活を取りあげた児島明である。

児島によれば、日系ブラジル人の場合、国家の制度に十分に守られているとはいえない。たとえば、日本国籍をもたない彼らの子どもたちは教育を受ける権利を十分に保障されていない。また、彼らの日常が自宅と職場との往復で終わったり、仕事が不安定で頻繁に職場が変わったりするために、地域の住民とほとんど接触がなく、地域と関わりのない生活を送るケースが少なくない。仲野のことばでいえば、彼らは「いま・ここ」に居場所をもっていないのである。日系ブラジル人の生活が浮き彫りにしたのは、「自己のうちに新たな地域性を織り込んでいくことができない」ことから生じる「生きられない」という危機的な事態である。

児島は、人は移動するとともに新しい地域性を取り込んで、自己の中に積み重ねるようにして複数の地域性をもって生きてゆくという。また、「移動する人々との接触は自明視された既存の境界枠を揺るがす」ともいう。この児島の指摘に従えば、人も地域とともに常に微妙に変化しているということになる。韓は、地域は実態(being)というよりも運動(becoming)として捉えるべきであると指摘しているが、これも同じ意味であろう。

移動する人々の存在はグローバリゼーションの進展によってクローズアップされるようになったが、児島によれば、「人はみな移動する存在である。」確かに、進学・就職・転勤など、人はその人生の諸段階に応じて住むところを変え、新たな状況に適応していく。ということは、われわれはみ

な単一の地域性からなる存在ではなく、濃淡はあるとしても複数の地域性を生きていることになる。これを裏返していえば、地域は常にこうした変化にさらされているし、誰もが「生きられる」ためには、変化を受容する柔軟性を地域はもっていなければならない。

韓と児島の指摘を踏まえれば、われわれは「地域」を、実体として固定した、閉じたものというよりも、変化に対して開かれたものとしてみるべきであろう。静態的ではなく、動態的にみる、そういう視点をもつべきであろう。地域を一人一人の「わたし」が生きられるように、誰もが「ここ」が自分の居場所だと思えるようにしていくこと、これこそ、今求められていることではないだろうか。

3. 「地域学」の現在

それでは、4年間の地域学総説においてわれわれはどこまで地域学を構築できたのだろうか。今年度はどのように貢献できたのであろうか。

(1) なぜ地域なのか

地域学について考えるとき、「なぜ、今、地域なのか」という問いを避けて通ることはできない。この問いは「現代とはいかなる時代か」という問題に連なる。西欧近代の生み出した国民国家の理念と機能は変化しつつある。また、「個人の自由」が徹底して追求され、個人化(individualisation)が著しく進展したことによって、新たな状況が生まれている。人々はもはやかつてのように強固な集団的な枠組みや規範に縛られることを好まない。この意味では、確かに自由になったといえるだろう。しかしその一方で、国家の諸制度が機能し難くなり、集団的なものに守られなくなって、社会的なリスクに、直接、さらされるようになってきている²。こうした状況において求められているのは、これまでとは異なる人と人との絆、あるいは表に出てこなかった緩やかな結びつきの形ではないだろうか³。近年、地域が着目されるようになったのも、こうした世界的な背景があるのではないだろうか。

さて、「地域学」はどのような貢献ができるのだろうか。「地域学」が目指しているのは、究極的には「人と地域のウエルフェア」・「生の充実」・「わたし（たち）の幸福」の実現である。しかし、これは地域学に限らず、すべての学術領域が目指しているものでもある。したがって、地域学の独自性は、この目的を達成するために地域という空間的枠組みを設定した点にある。

それではなぜ空間的枠組みなのだろうか。地域という空間は人間にとってどのような意味があるのだろうか。「総説」の第2部で「地域で支え合う食と農―暮らしの基本を考える」と題して講演をおこなった結城登美雄（民俗研究家、地元学）は、全国のおびただしい数の農村を自ら調べ歩いた経験を踏まえて、「地域とは、家族が集まって暮らすところである」と力強く言い切った。そして次のように説明を加えた。たとえ限界集落といわれるところでも、家族はみな、明日はもっとよくな

² 宇野重規「社会科学において希望を語るとは 社会と個人の新たな結節点」、東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』、東京大学出版会、2009年、273-276頁。

³ ジャン＝ポール・ヴィレーム「超近代(ultramodernité)の文脈における宗教」、ジャン・ボベロ、門脇健編『揺れ動く死と生』、晃洋書房、2009年、169-197頁。

ると思って生きている。さまざまな願いや希望、期待を抱きながら、それを何とか実現したいと努力している。しかし簡単には実現できないので悩みや課題を抱え、何とか解決したいと思いながら一人一人が生きている。それでもかなわないことがある。だからみんなで力をあわせて実現していく。地域づくりとは、まさにこの部分である。結城は、人はみな生きるために人と人とのつながりを必要としている。家族はその原点であるが、それぞれの希望・願望を実現するには互いを支え合うもっと大きなつながりとそのための場が必要だ。それが地域である、というのであろう。

仲野は、『『ここ』に生きる『わたしたち』を考えるということ』というタイトルで前述の報告をおこない、「わたし」が生きるためには「ここ」という場と「支え支えられる関係」を必要としていると語った。児島は、人は移動しながらその先々で「自己のうちに新たな地域性を織り込んでいく」、それができないと生きられない、という。専門を異にする三者の表現は違うが、実は同じことを語っているのではないか。人と人とがつながる具体的な場なくしては、人は生きられないということである。これが「地域」の原点ではないだろうか。

別の表現をすれば、「地域学」でいう「地域」とは、現に存在するもの（実体としての地域）であると同時に、未だ実現していない、これからそうあってほしいと願望されるもの（望まれる地域）でもあるだろう。

（2）人と地域性（地域文化）との関係

次に、人と地域性、とりわけ地域文化との関係について考えたい。光多によれば、「地域」とは、自然環境（生態系軸）と人間の営み（文明系軸）の相互作用から生まれるものである。地域性も同様である。吉村は、地域性のうちとくに文化に着目して、地域文化は人の個性の一部になっており、それがどのように扱われるかは「人間の尊厳」に関わるという。地域文化は人と切っても切り離せないものということになる。地域性（地域文化）は自然環境の制約と人間の関与の結果であるから、長期的な時間のなかで形成されたものとみるべきであろう。この意味で、急激には変化しないもの、あるいは緩やかに変化するものだといえるだろう。

確かに、光多と吉村の見解は地域を考えるとき基本となるものだが、これに他地域との関係や人の移動という観点を組み込む必要がある。内藤によれば、チェコの地域意識はチェコだけで自己完結的に形成されたわけではない。他の国々や地域との厳しい影響関係のなかで生まれたものである。これは地域性（地域文化）についてもいえる。また、韓や児島のように人を移動する存在としてみるとときには、人と地域性との関係はもっと微妙で複雑なものになる。移動にともなって誰もが「自己のうちに新たな地域性を織り込んでいく」とすれば、人は単一の地域性だけではなく、複数の地域性を生きていることになるからだ。また、地域は移動する人々によってその「既存の境界枠を揺るがされる」のであるから、地域自体もつねに微妙に変化しているはずである。そうだとすれば、地域性を変化の相においても考えなければならない。

ほとんど不変といっていい部分と微妙に変化していく部分、われわれは地域性のこの両面をみるべきであろう。

（3）二つの知の出会い

人と地域性（地域文化）との間に深いつながりが認められるとすれば、われわれが目を向けるべきところも自ずと変わってくるのではないか。仲野は「わたし」と「いま・ここ」から考えること（「わたし」から考える地域）を提案した。家中茂（環境社会学）もまた民間学を紹介しながら、自

分の生活、自分のおかれた状況をまず理解し、そこから問題をつかまえようとする、すなわち自分の問題とつながった学問の必要性を主張している。筆者は二人の主張に強い共感を覚えるが、しかし彼らの表現は研究者らしく抽象的である。

彼らのいわんとしたことは、外部講師によって、別の言葉で、より具体性をもって語られたように思う。たとえば、「足元の宝を見つめて暮らしをデザインする―土地からの授かり物―」と題した講演を行った松場登美であり、「地域で支え合う食と農―暮らしの基本を考える―」の結城登美雄である。二人には共通点がある。自分の外部にある、本当には納得していない価値観、都市の基準、経済合理性というもののさしなどに対して一定の距離をとり、自分の日常のなかにあるもの、暮らしの中で積み上げられてきたものをベースにして、自分の足元から考え、実践につないでいることだ⁴。だがそうかといって、ふたりのまなざしは決して小さな世界だけに向けられているのではない。むしろ社会に対する鋭く厳しいまなざしとなって、これまで否定されたり見過ごされてきたものに光を当てている。

二人の講演は対照的であった。松場の講演は静かな落ち着いた中で聴衆の心に「わたしもそう生きたい」という願望と希望を感じさせた。結城はとてつもない迫力と説得力でわれわれをとらえた。二人の話を聴いていた学生たちの目はいつもとまるで違っていた。これはよくよく考えるべきことである。学生たちの反応が違ったのは、彼らの話が厳しく豊かな経験に裏付けられていたからばかりではおそくない。重要な何かに触れていることを感じ取ったからではないだろうか。

筆者自身は、「地域学」の目指しているものは、具体的な実践活動のなかにすでに存在しているのではないかと考えている。それが言葉で明確に語られることは稀かもしれない。断片的であるかもしれない。「地域学」の果たすべき役割のひとつは、このような知を吸収して理論化することにあるのではないか。アカデミックな知と生活の知との出会い、それが「地域学」であろう。

（４）問いを立て、問題を解決するための方法を考える地域学

「ひとりひとりが生きられる」地域本来の機能を果たすにはどうすればいいのか、これが「地域学」の課題であるが、この課題は常に具体的な形となって現れる。この具体化した問題に直接解答を提示することは「地域学」の役割ではない。具体的な課題を前にして、どのように「問い」を立て、それをいかにして解決するかを考えるためのポイントと材料と方法を提示する、それが地域学の役割であろう。

「問い」を立てる（問題を設定する）とは、たとえば、具体的な課題の解決を目指すとき、課題の根底にある問題は何か、考慮すべきポイントは何か、どこから何を基準に考えるべきか、という

⁴ 松場は実に興味深い表現をしている。たとえば、「土地の声を聞く」、「大地から力をいただいて物を作っているような気がします」、「土地の力に守られて今日まで来たような気がします」、「ここに住むようになって贅沢のもののさしが変わりました」など。「松場登美―石見銀山―足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」、西村幸男、埴正浩『証言・町並み保存』（学芸出版社、2007年）。松場の仕事や考え方については、この他に松場登美『群言堂の根のある暮らし―しあわせな田舎―石見銀山から』（家の光協会、2009年）を参照。結城は地元学について次のように述べている。「地元学は経済を絶対基準としてさまざまな幻想のイデオロギーで呪縛するものを相対化する生活の基層の学である。」「地元学とは、その土地を生きた人々から学ぶことを第一義とする。」結城登美雄「わが地元学―その土地を生きた当事者に学ぶ―小さな町・村の小さな地元から、少しずつ変わりはじめた」、『現代農業・5月増刊号（52号）地域から変わる日本―地元学とは何か』、農山漁村文化協会（2001年5月）を参照。

ところから考えることである。これは容易なことではない。この場合、具体的な課題を前にして、いきなり地域という空間的・集団的枠組みで発想するよりも、まずは仲野のいう「わたし」から考えるべきではないだろうか⁵。その理由はいくつもある。ひとつは、地域という枠組みからの発想にはときに「ひとりひとりが生きられる」という地域本来の目的を見え難くすることがあるからだ⁶。また、今日、個人化がさまざまな問題を生んでいるとはいえ、やはり「個人の自由」は尊重されるべき価値である。「わたし」から発想することで、「個人の自由」を前提にし、その上で個人をとりまく様々な関係性を具体的に想起検証することが可能になるのではないだろうか。それは同時に徹底した個人化に起因する諸問題を照らし出すことにもなる。仲野のいう「構造・関係性・時間の3つの往復」は、具体的な課題を大きな文脈のなかに位置づけ理解することを可能にするが、それは「わたし」から出発して「公」に至る道でもある。

それでは設定された問題をどう解決するのか。地域で解決を図る必要がある場合、光多のいう「地域のマトリクス」をもとに、必要に応じて、検討すべき地域の範囲を確定し、地域のもつ特性（地域性）を明らかにしつつ、対策を考えることになるだろう。正確に言えば、対策を考えるための材料と方法を提示することになる。

光多は地域学の特質のひとつとして、客観的研究と行動科学の融合、「事実の把握(Sein)とあるべき姿(Sollen)の視点の保持」を挙げている。換言すれば、地域学は「地域がどう在るか」を研究するにとどまらず、住民が「地域の在るべき姿」を自ら思い描き、その実現に向けて努力していく、そのプロセスに貢献するものだ、ということになる。だとすれば、「事実の把握」はいかにしてなされるのか。「あるべき姿の視点」はどのようにして保持されるのだろうか。両者はどう関連するのだろうか。

この問題については、光多の「地域のマトリクス」について補足説明をしておかねばならない。地域は自然環境と人間の営みの相互作用であるというとき、そこには時間軸、つまり歴史的視点が組み込まれているということである。したがって、「事実の把握」（地域の現状把握）は歴史を抜きにしてはありえず、同時に「あるべき姿」にも関わるのである。

この「事実の把握」はどういう方法でなされるのだろうか。たとえば、空間の特性を精緻に把握しようと思えば、藤井正が示した地理学の地域概念や分析方法⁷が有効であろう。このように目的と必要に応じてさまざまな学問領域の概念や方法論が動員されることになるだろう。地域学が学際的といわれるゆえである。

「あるべき姿の視点の保持」はどうだろうか。これは難しい問題を含んでいる。そもそも誰の視点なのか。地域といえば、真っ先に想起されるのは、地域づくり、地域政策、地域の活性化である。この場合、しばしば雇用や経済の活性化が最重要課題となり、行政が主導しがちである。これらが重要であることは確かだが、これまでの議論から明らかなように、「地域学」にとって重要なのは、「わたし」であり、「当事者」であり、住民である。当事者意識を欠いた取り組みはきわめて危険で弊害

⁵ たとえば、2008年度と2009年度の「総説」で講演を行った松場登美の活動は素晴らしいものだが、出発点はあくまで自己の感性や生き方であって、地域ではない。柳原「『地域学総説』の挑戦3」、第3章「よき実践から学ぶ」の第3節「松場登美氏『歴史的遺産と地域づくりー地方の可能性ー』」を参照。

⁶ 柳原「挑戦3」第4章「地域住民の生活と行政」を参照。

⁷ 藤井正「第1章『地域』という考え方」、藤井正・光多長温・小野達也・家中茂編『地域政策入門 未来に向けた地域づくり』（ミネルヴァ書房、2008年）参照。

が大きい。このことは誰の目にも明らかである。また、視線があるものに集中することで、逆に重要な何かが見えなくなることもある⁸。「わたし」からの視点はこの意味でも重要である。

次に、「あるべき姿」とはどういう意味であろうか。どこから出てくるのだろうか。光多は「苗床」とか「土壌」という表現をよく使う。良い種（ほかの地域でうまくいった試み）であっても、それを発芽させるだけの苗床がなければうまくいかない、というのである。地域にはそれぞれ特性があって、それを活かしたものでなければ成功しないという意味である。さらにいえば、ある状態を望ましいと思い、それを実現しようとすれば、それが実現できる条件をつくりださねばならないときもある。地域の個性や伝統の一部であっても、それが障害となるのであれば意識的に修正しなければならない、そういう場合もあるということであろう。筆者は、光多のいう「あるべき姿」を地域住民が望ましいと思う状態、あるいは地域性に照らして実現可能な範囲を指すものと解釈している。

しかし、「あるべき姿」を思い描くのは容易なことではない。吉村によれば、地域は独自のノーム体系（norm: 地域の人々に共通の行動規範・振舞い方・考え方や感じ方）をもち、「当たり前さ（厳密にはその尺度）を共有する人々が形成する社会的まとまり」である。ノームは住民にとって自明であり、意識にのぼることはない。当然、検討の対象にならない。したがって、住民が思っている地域の姿と客観的な地域性（地域文化）との間には必然的にズレがあることになる。自分の文化的な「苗床」を正しく認識し、「あるべき姿」を思い描くには意識的な努力を必要とするのである。地域学はこういう点にも取り組まなければならない。

以上、仲野の視点を「問い」を立てる方法として、光多の「地域のマトリクス」を問題解決の方法として検討してきた。前者は「わたし」からのアプローチ、後者は地域からのアプローチということもできるだろう。両者のパースペクティヴは基本的に異なっており、相応関係にあるわけではない。この違いを認めた上で互いを鏡とすれば、地域学を支える太い柱となるだろう。

最後に、地域の空間的な規模について確認しておかねばならない。地域というとき、どうしてもどれくらいの規模の空間をいうのか、ということになる。「地域学」は実践の学、問題解決に貢献するための学である。したがって、解決すべき問題に応じて対象となる地域の空間的規模は異なる。また、何をどう分析するかも変わってくる。地域の範囲は予めこれこれの大きさと決まっているわけではなく、具体的な課題と設定された問題によって選択されることになる。

おわりに—これまでの成果と今後の課題—

地域学総説の4年間を振り返ると、われわれが発した問いは、突き詰めれば「地域とは何か」、「地域学とは何か」であった。これは当然といえば当然の、まったく素朴な問いである。そもそも、個人の自由が大原則で、国境を越えて行動し考えようという時代に、なぜ地域なのか。地域という空間的・集团的な枠組で考えることにいったいどんな意味があるというのか、どんな役に立つのか。そんな疑問が筆者にはあった。たまたま筆者が授業実施責任者になった関係で、この問いが授業の中心テーマになったのかもしれないが、やはり「地域学」にとって避けて通ることのできない道だっ

⁸ 結城はこうした取り組みの根底にある発想方法や基準を地元学の立場から厳しく批判している。結城前掲論文、14～16頁を参照。

たといえるだろう。

しかしながら、筆者の場合、このような疑問に対して満足のいく答えを見出すことはなかなかできなかった。違和感も消えなかった。地域をポジティブに捉える方向に気持ちが向かい始めたのは、2008年度に「生の充実」や「わたし」の「いま・ここ」という視点を得てからである。また、外部講師の方の講演を聴いてからである。地域は重要な何かに関わっているのではないか、そこには自分自身が見失っていた何かがあるのではないかと感じたのである。

このような筆者個人の主観的記述は本稿に相応しくないかもしれない。それにもかかわらず敢えて紹介したのは、学生たちの反応を見ていて、彼らもそうではなかったかと思うからである。昨年度と今年度の「総説」はそれまでとは随分雰囲気違った。学生達から「地域学」に対する「拒否反応」が消えたように思えるのである。これは大きな変化ではないだろうか。

今年度についていえば、第1部と第2部（外部講師の講演）、第4部はこの変化を決定的にしたようである。もちろん、報告内容は高度で、ときに難解でもあったから、学生たちは報告内容を細部までは理解できなかったかもしれないが、「地域」と「地域学」の重要性を十分に感じ取ることができたのではないだろうか。

具体的にいえば、光多報告は、地域学を主に19世紀以降の大きな経済変動とそれに対する諸国家の取組みの中に位置づけるとともに、経済についてわれわれがもっていた素朴な思い込みを修正し、生活のなかにある豊かさが資源であることに気づかせた。仲野報告は「わたし」を包み込んでいる構造と関係性に眼を向けさせ、現実はどう取り組むことができるか、示唆を与えた。内藤報告は、国際関係の厳しさと、そのなかでの地域意識や地域性の切実さを表現した。韓報告と児島報告は「移動する人々」の視点から「地域」と地域性のもつ多様な意味を浮き彫りにした。これはまったく新しい視点で、地域に対するわれわれの見方を大きく変えた。これらの報告は、それぞれ独特の視角と方法論で「地域」に迫り、「地域」のもつ様々な意味を照らし出して、その大きさと豊かさ、深さを明らかにしたと筆者は考えている。「地域学」の存在意義と輪郭をはっきりしてきた。

今後の課題については、無数にあるといわねばならない。これまでの「地域学」の成果はいわば原論的なものである。われわれがどういう視点で「地域」を捉え、「地域学」を構想するのかを示したにすぎない。それも限られたものである。これまで検討してきたのは「地域の体系図（地域のマトリクス）」、「個人と地域」や「わたしと構造・関係性」が中心で、国民国家を支える原理原則や諸制度との関係についてはほとんど取り上げていない。原理原則については、たとえば、「生の充実」にとって地域文化が不可欠のものだとすれば、地域文化と国民国家を支えてきた市民としてのあり方（市民性）との関係も問われることになるだろう。このほかに、「移動する人々」の問題も重要である。地域性との関係もそうであるし、いうまでもなく国家の原理原則や諸制度とも関わる。いずれの問題も理論的な検討だけでなく、実証研究のレベルでの検証が必要である。

「地域のマトリクス」に関していえば、自然環境と暮らしとの相互作用や、歴史と地域のあり方との関係など、マトリクスを構成するそれぞれの部分を、常に地域学の目的を視野に入れて、理論的・実証的に検討しなければならない。さらに地域と他の諸々の空間との関係性も検討すべきであろう。

筆者としては、「わたし」からのアプローチと「地域」からのアプローチとの交差を実証研究のレベルでみてみたいが、これはかなりの難題であろう。

参考資料

2009年度地域学総説授業日程

第1部 地域を見る視点（コーディネーター 柳原邦光）

1. 4/8 「これまでの地域学の成果」（柳原邦光）（＋今年度講義の全体のながれ）
2. 4/15 「『ここ』に生きる『わたしたち』を考えるということ」（仲野誠）
3. 4/22 「グローバル化の中の地域経済」（光多長温）

第2部 公開講演「地域を創るⅢ」（コーディネーター 家中茂）

4. 5/13 「自伐林家の森業の復活で山村の再生を」（中嶋健造／NPO法人土佐の森・救援隊、西日本科学技術研究所）
5. 5/20 「足元の宝を見つめて暮らしをデザインするー土地からの授かり物ー」（松場登美／他郷阿部家、群言堂）
6. 5/27 「地域で支え合う食と農ー暮らしの基本を考える」 結城登美雄（民俗研究家、地元学）

第3部 テーマで考える地域

＜地域と教育＞（コーディネーター 河合務）

7. 6/3 「『育ち』から地域を考える」（奥野隆一）
8. 6/10 「教育運動から地域を考えるー郷土教育と峰地光重」（河合務）
9. 6/17 「『学力』から地域を考える」（矢部敏昭）

＜地域と環境＞（コーディネーター 中野恵文）

10. 6/24 「地域と環境Ⅰー湖山池の自然環境」（矢島啓／鳥取大学工学部）
11. 7/1 「地域と環境Ⅱー湖山池の歴史環境」（錦織勤）

第4部 地域から世界を見る／世界から地域を見る（コーディネーター 仲野誠）

12. 7/8 「スラヴ文化の『再生』ーチェコ人のナショナリズムと精神性」（内藤久子）
13. 7/15 「中国系移民の映画とそのアイデンティティ」（韓燕麗）
14. 7/22 「教室のなかの世界／世界のなかの教室」（児島明／和光大学）
15. 7/29 全体ディスカッション

授業実施責任者 家中茂